當然であり、其の苦辛の樣子と共に、之が研究の困難は思ひ半ばに過ぎるものがある。後に至つて、本生譚と阿育王譬喩とで、生氣のある神聖な二方面を進め得たが、而も其の根幹ともいはゞ云はれる佛陀の生涯についての幹は、いつも不自然な育ちの惡いものであつたが、終に印度ギリシア美術家に至つて、あらゆる眞實に對して佛陀の造形的原型を創めるやうになつた。

犍陀羅派

犍陀羅派には印度古代派の常道を急に越えてゐる點があり、四大奇蹟の新しい現はし方を見ても、之と思へない程趣が異つてゐる(甲、二〇八圖)。成道に於ても、轉法輪に於ても、たゞ佛陀の寶座だけではなくなり、又、文獻の通りに、佛母の右脇誕生を示し、涅槃の姿も之と同樣に寫實的である。かくて、外面內面のあらゆる慣習、數世紀の久しきに亙る一切の手法、一言にしていへば、あらゆる傳承が、忽ちにして粉碎されてゐる。

こゝに於て我等は犍陀羅を看過することは出來ぬのである。中印度の傳承